

教員養成学部在学生の教職に関する志望度調査

—— 教職を志望しない学生の要因分析 ——

中 雄 勇 人・霜 触 智 紀

Aspiration Survey for Teachers of Education Students

—— Factors that Students do not want to be Teachers ——

Hayato NAKAO and Tomonori SHIMOHURE

教員養成学部在学生の教職に関する志望度調査

—— 教職を志望しない学生の要因分析 ——

中 雄 勇 人¹⁾・霜 触 智 紀²⁾

1) 群馬大学共同教育学部保健体育

2) 新潟大学大学院現代社会文化研究科

(2020年9月30日受理)

Aspiration Survey for Teachers of Education Students

—— Factors that Students do not want to be Teachers ——

Hayato NAKAO¹⁾ and Tomonori SHIMOHURE²⁾

1) Health and Physical Education Major, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

2) Graduate School of Modern Society and Culture, Niigata University

(Accepted on September 30th, 2020)

I. 緒 言

教員養成学部においては、専門職業人としての教員を養成する目的がある。教員需要の動向を見ると、文部科学省の調査において全国の公立学校教員の採用者数は平成12年度以降は右肩上がりに増加傾向にあることが報告されているにもかかわらず、受験者数や採用倍率は減少傾向にあることが報告されている¹⁾。この原因として、教員養成系の大学・学部において教員免許を取得したものが教員採用試験を経て教員になることなく、他の職を選択していることが原因として考えられる。近年においては、一般企業などへの大学卒業生の採用率が非常に高い水準で推移していることなどから、就職に関して学生が幅広い選択をすることが可能であることや、教員採用試験に不合格になった際でも臨時採用などの形で教職の関連の仕事に就くのではなく、一般企業などへの正規の採用を選択することで、既卒者の受験率が低下していることなどが原因となっているのではないかと考えられる。学生が将来の仕事について考え選択することは当然のことであるが、大学の教育課程は育成する人材像に合わせた受け入れ方針を掲げて学生募集を行っており、特に専門職業人を育成する大学・学部等において、育成するものとは異なる道を選択するものが増えることは非常に大きな問題である。教員養成学部等において、教職を選択しない理由について入学時の教員志向の欠如や入学後に学びを深めることでの教員志向の減退など様々な理由が考えられる。よって、教育学部の教育内容を考えるにあたり、教員志向に変化をもたらす要因やその解決方法などを模索することは重要である。

先行研究において、教員になることへの不安についての調査²⁾や教職への不安を軽減するための介入などの検討³⁾が報告されている。また、学生の教職の志望度を調べた結果、入学後1年生から2年生にかけて教職への志望度が減退すること⁴⁾、3年生において教職を志望する学生とあきらめてほかの職を志望する学生の分化が起こる⁵⁾と報告されている。これらのことから、1年次から2年次の初期の教育において、教員への志望度が低下する要因を探ることは、非常に重要であるが近年の報告において、その要因に焦点を当てた

ものは見当たらない。また、教員への志望度が上昇した要因を合わせて探ることで、今後の指導の一助となるのではないかと考えた。そこで本研究では、教員養成学部在籍している学生を対象に、教職に関する志向調査を行い、教職への志望度が変化する要因を探ることで今後の教育活動への一助とすることを目的とした。

II. 方 法

対象は教員養成学部所属する1、2年生(260名)とした。研究に先立ち、研究の趣旨及び内容について説明を行い同意を得たものを対象とした。調査結果の回収率は83%であった。

調査方法として、質問紙による調査を実施した。質問項目は①入学時の教職志望の有無、②入学時から現在までの教員志望度の変化の確認及び、③教育学部への進学理由、④教員志望度の変化の理由、⑤教員志望度低下への対策、の大きく5項目に分けて調査を行った。項目④については、教職への志望度の変化理由として想定される項目19題にその他を加えた20題に分けて提示し4件法にて回答させるとともに、その中でも特に影響を受けたと思われるものについては、その理由について自由記述にて回答させた。

また、入学後の教職への志望度の変化要因を検討するために、質問項目③において、入学時に教員を志望しており入学後も教員を志望する気持ちが上昇したまたは維持している、もしくは入学時には教員志望ではなかったが、入学後に教員を志望する気持ちが上昇したと答えた対象を教員志望度上昇群、入学時には教員を目指していたが、入学後教員を志望するきもちが低下したと答えた対象を教員志望度低下群に分けて検討した。

III. 結果及び考察

入学時の教員を目指していたかについて調査を行った結果、教員志望が82%、入学時より教員を志望していなかった割合が18%となった。また、入学後に教員を志望する気持ちに変化があったかの問いに対して、入学時に教員を志望しており入学後も教員を志望する気持ちが上昇したまたは維持している、もしくは入学時には教員志望ではなかったが、入学後に教員を志望する気持ちが上昇したと答えた教員志望度上昇群は全体の48.3%、入学時には教員を目指していたが入学後教員を志望する気持ちが低下したと答えた教員志望度低下群は36%、入学当初から一貫して教職を希望していない学生が15.6%となった。教員志望度上昇群において高い割合を示した進学理由をみると、「子供と接することが好きなため」や「人に物を教えることが好きなため」、「教師はやりがいのある仕事だと思うため」など、大学の教育内容に即した形で入学したものは、その後も教員への志望度が高く維持されることが認められた。しかしながら、教員養成大学・学部においてアドミッションポリシーに示されているように、教職に関わる専門職業人の養成を掲げているにも関わらず、入学当初より一定数の教職を希望しない学生の入学が認められたことから、その理由について教育学部への進学理由を見ると、「他大学・学部が不合格であったため」や「家庭の事情のため」、「受かりそうな大学・学部を選んだため」といった回答が多く見受けられた。また、教員志望度減少群の教育学部への進学理由としては、教職を希望しない学生が答えた項目に加え「給与が安定しているため」といった項目において高い割合を示した。大学を選択する理由として経済的な理由や、将来の職業への明確なビジョンが持てない状態で進学してしまった学生においては、入学後も大学において意欲的に学ぶことが出来ずにいる姿が伺えた。先行研究において、志望していない大学・学部に進学した者は大学生活における目標などが持てず大学生活全般に対する満足度が得られないこと⁶⁾や、自らの学力を基準に受験を決めた者は、大学入学が最優

先事項となり、その後の就職などについての考えが先延ばしにされている⁷⁾などと報告されていることから、進学先を選択する際に、将来の職業も踏まえて進学を考えることが大変重要であることが改めて認められた。対策としては、進学前に、学部の特性を十分に理解させるとともに体験入学や学校説明会を通じてそれぞれの大学・学部等が育成する学生像をより明確にイメージさせることが必要となると考えられる。

また、教育系大学・学部においては大学での学びを通じて、入学した学生に対してより教職へ就くことへの意欲や関心を引き出す必要があることから、入学後の教員志望度の変化を検討することはより良い教育環境を整える上で非常に意義のあることだと考えられる。表1に、教員志望度の変化理由について、教員志望度の上昇群・低下群別に示した。教員志望度の変化について4件法で調査を行い得られた回答のうち、「ややあてはまる」「あてはまる」割合の合計値が50%を超える高い数値を示した回答として、教員志望度上昇群では「児童・生徒との関係について」・「大学の指導法の授業について」・「模擬授業等の実践的な授業について」・「実習等の子供と触れ合う場について」・「専門教科の指導について」の5つの項目であった。教員への志望度が高まる要因としては、子供との関わり方や、指導法や模擬授業など教職に就くために必要なより実践的な内容に触れることや、実際に子供との関わりが強く影響を与えていることが伺えた。先行研究においても、教育実習を通じて教員志向が高まること^{8,9)}が報告されていることから、子供と触れ合うことができる実践的な実習機会を入学後の早い段階で設けることは、教員への志望動機を高めることに非常に重要であることが認められた。しかしながら、もともとの教員志向の強くないものが実習を行った際には教員志望の変化はあまり見られないとの報告¹⁰⁾もあることから、実習に取り組む前段階での教育に関する専門的な基礎知識や子供との関わり方など動機付けが必要であるとも考えられる。

表1 教員志望度上昇・低下群別の教員志望度の変化理由の割合

質問項目	教員志望度上昇群				教員志望度低下群			
	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
児童・生徒との関係について	5.9	12.7	<u>45.1</u>	<u>36.3</u>	27.6	21.1	<u>30.3</u>	<u>21.1</u>
保護者との関係について	22.5	43.1	26.5	7.8	17.1	17.1	<u>38.2</u>	<u>27.6</u>
同僚や上司との関係について	22.5	42.2	30.4	4.9	28.9	22.4	31.6	17.1
教員採用試験の勉強や準備について	29.4	41.2	22.5	6.9	38.2	39.5	15.8	6.6
教員採用試験の倍率について	32.4	41.2	21.6	4.9	44.7	32.9	7.9	14.5
大学の講義形式の授業について	22.5	44.1	26.5	6.9	31.6	31.6	25.0	11.8
大学の指導法の授業について	14.7	28.4	<u>42.2</u>	<u>14.7</u>	25.0	31.6	30.3	13.2
模擬授業等の実践的な授業について	11.8	28.4	<u>39.2</u>	<u>20.6</u>	26.3	36.8	19.7	17.1
実習等の子供と触れ合う場について	4.9	5.9	<u>31.4</u>	<u>57.8</u>	32.9	28.9	25.0	13.2
専門教科の指導について	7.8	26.5	<u>44.1</u>	<u>21.6</u>	28.9	35.5	22.4	13.2
専門強化外（外国語や道徳を含む）指導について	14.7	40.2	34.3	10.8	25.0	34.2	27.6	13.2
特別な支援を必要とする子供への指導について	16.7	38.2	27.5	17.6	32.9	42.1	15.8	9.2
部活動の指導について	29.4	38.2	9.8	21.6	31.6	28.9	25.0	14.5
「売り手市場」な一般企業への就職について	54.9	38.2	4.9	2.0	36.8	28.9	28.9	5.3
給与について	26.5	38.2	25.5	9.8	38.2	25.0	23.7	11.8
仕事量について	30.4	33.3	28.4	8.8	9.2	9.2	<u>36.8</u>	<u>44.7</u>
副業の認可について	47.1	42.2	7.8	2.9	55.3	32.9	9.2	2.6
休みなどの福利厚生について	35.3	34.3	25.5	4.9	28.9	23.7	21.1	26.3
採用の形態（義務教育と高等学校での採用）について	37.3	42.2	16.7	3.9	36.8	32.9	13.2	17.1

※数値の単位はすべて%とする

また、教員志望度低下群において、高い数値を示した項目は「児童・生徒との関係について」・「保護者との関係について」・「仕事量について」の3項目であった。教員志望度上昇群においても割合の高かった「児童・生徒との関係について」の項目が当てはまった理由として、自由記述欄の記載を確認したところ「児童・生徒の悩みなどに気づいて対応できるか不安になった」「教師としての力量に自身が持てない」など、子供と触れ合いや、講義を通じて教員の実際の仕事や指導方法を学ぶ中で、自らの力量に自身が持てなくなり教員への志望度が低下している姿が伺えた。同様に、「保護者との関係について」の項目の自由記述には「モンスターペアレンツへの対応に困る」といった内容が記載されていた。教育法や教科の専門知識などの大学での学びだけでは対応しきれない、様々な現場における臨機応変な対応能力を身につけることができるよう、より段階を踏んだ児童理解の進め方やロールプレイなどを積極的に用いた応用力を身につけることができる授業内容の工夫などを行うことで、学生が教職に抱く不安感を和らげることが可能となり教員志望度が上昇するものと考えられる。また、「仕事について」、教員の残業の問題や保護者対応など教員の多忙化や、実際の仕事量を知ることによって自分が教員となった際に仕事をこなすことができるのかという不安感から教員への意欲が減少している姿が伺えた。大学などの養成機関においてこの問題を解決することは非常に困難であるが、授業の実践力や体験を通じての児童・生徒理解を行える機会の創出など、教員として必要な能力を幅広く身につけることで、少しでも不安感の払拭につながるのではないかと考える。今回、教員志望度の低下の要因として、教師としての力量など自らの指導力不足が原因の一つとして考えられる。よって、より実践的な指導力を身につける機会や、自らの能力に自身が持てない学生に対する段階的に児童理解や指導の工夫など指導力を醸成する機会を設けることが、教員志向の学生を増加させる上で重要であることが示唆された。

IV. まとめ

教員養成学部所属する学生を対象に、教員に関する志望調査を行い、教職への志望度が変化する要因を検討した。結果、教員の志望度は子供との関わりや模擬授業や指導法などの教職に関わる実践的な知識や経験を持って上昇することが認められた。しかしながら、自らの指導力に自信を持っていない状態で子供との関わることで、自らの指導力に不安を感じ、教員への志望度が低下する要因となることも認められたことから、現場での事例を踏まえたより実践的な指導力指導力を身につけることができる機会を増やす工夫などをすることが、教員志向の学生を増加させる上で重要であることが示唆された。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2019) 「平成 30 年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について」
- 2) 若松養亮、古川津世志 (1997) 「教員養成学部学生における教職志望意識の変化に及ぼす要因の検討」 進路指導研究 17-2 pp.19-29.
- 3) 小野稔文、安藤美華代 (2011) 「教職志望大学生の就職不安への予防介入に関する予備的研究」 教育実践学論集 12 pp.55-69.
- 4) 姫野完治 (2013) 「学び続ける教師の養成」 大阪大学出版
- 5) 佐々木顕彦 (2019) 「教職課程履修者の教職回避に関する調査研究—英文科の学生を対象に—」 武庫川女子大学 学校教育センター年報 第4号 pp.89-101.
- 6) 竹内正興 (2014) 「大学入試構造と不本意入学者のアイデンティティ —AO 入試は不本意入学者を減少させる施策となれるのか—」 佛教大学大学院紀要教育学研究篇 42 pp.35-51.
- 7) 三保紀裕、岡田 努、轟 亮 (2008) 「金沢大学文学部学生における大学進学動機と進路意識」 人間社会環境研究 15

pp.19-29.

- 8) 中野靖彦 (2000) 「教育実習に関する研究：実習前後の心理的变化について」 愛知教育大学研究報告 49 pp.81-85.
- 9) 渡辺 匠、櫻井良祐 (2018) 「教員養成系大学における教員志望動機の回復と規定因」 第7回大学情報・機関調査研究集会 論文集 pp.26-31.
- 10) 阿形健司 (1997) 「教育実習後の教職志向に関する一考察」 愛知教育大学強化教育センター研究報告 21 pp.109-114.

